

【高校野球一〇〇周年特別企画】甲子園、延長一八回、五つの物語  
 第五回(最終回)

# 延長一八回が紡いだ 審判“師弟物語”

〈無心の球を無我の境地で判定しつづける——〉  
 審判としてもう一度、甲子園に舞い戻ってきたふたりの球児。



(上)高校野球審判委員の堅田外司昭氏  
 手には永野元玄氏からもらったボール  
 (下)永野元玄氏 ©朝日

## 松下茂典

まつしたけのり  
 (フナイクシヨシライター)  
 一九五四年石川県生まれ。明治大学  
 卒。代表作は「神様が倒れた試合」  
 山下・星陵vs尾藤・箕島―延長18回  
 の真実―「日本シリーズ」の決定的瞬間  
 ―その時、指揮官は何を決断したか―  
 「ダルビッシュ君はどこから来たのか」  
 「原野のケンカ野球一代」など。

## もう一度、グラウンドを ごらんなさい

箕島(和歌山)との延長一八回  
 で、二〇八球を投げ、敗戦投手にな  
 った星陵(石川)の左腕エース・堅  
 田外司昭が、甲子園のグラウンドに  
 一礼し、インタビュ通路に向かう  
 階段を下りたときだった。球審の永  
 野元玄から呼び止められた。一九七  
 九年八月十六日の午後八時過ぎであ  
 った。

そのときのことを、先日、あらた  
 めて堅田(現在、パソナ・バナソニ  
 ックビジネスサービス、サービスソリ  
 ユーション部門長)に取材した。堅  
 田は雨の中、待ち合わせ場所の京阪  
 本線・西三荘駅まで駆けてきた。  
 「インタビュ通路に向かう階段を  
 何段か下りたとき、永野さんに声を  
 掛けられたんです。『もう一度、グ  
 ラウンドをごらんなさい』。すべて

を包み込むような声でした。『は  
 い、わかりました』と答え、階段を  
 上がってグラウンドを一瞥し、また  
 階段を下りると、永野さんから試合  
 で使ったボールをいただいたんで  
 す」

永野は球審を務める際、使用済み  
 のボールを一個は必ずボールバッグ  
 にしのばせておく習慣があった。滑  
 りやすい新球をつづけて投手に渡す  
 と、負担になるからだった。永野の  
 投手への思いやりは、審判を引退す  
 るまで三〇年間もつづくことにな  
 る。

永野には石川、大阪、兵庫、和歌  
 山、東京と、いろいろな場所で取材  
 したが、阪急京都線・桂駅で落ち合  
 うのは二回目のことだった。

「審判の越権行為かもしれませんが、  
 どうしても堅田君にボールを渡  
 したかったんです。試合途中から風  
 がパタリとやみ、カクテル光線が暑

さを増幅させていました。審判のわ  
 たしですら疲労困憊(こんぱく)でしたから、選  
 手たちはそれ以上だったでしょう」  
 当時、永野の体重は九〇キ。一試  
 合さばくと、四キ減ったという。後  
 述するが、高校野球の審判に給水が  
 許されるのは、なんと一九九一年春  
 のセンバツ大会からだった。

「堅田君は延長一五回ぐらいから、  
 肩で息をしながら投げていました。  
 もし涼しい風が吹いていたら、引き  
 分けていたかもしれません。私情に  
 なりませんが、あそこまでいったら、  
 引き分けにしてやりたかった……」

## 永野捕手の “落球事件”

球審を務めた永野が、星陵の堅田  
 に試合球を渡したのは、たんなる判  
 官臆胆(おびだん)ではなかった。連載第三回で  
 詳述したように、加藤直樹一塁手  
 (星陵)の“転倒”を間近で目撃し



1953年夏の甲子園大会。決勝13回表、松山商に決勝点が入る  
土佐高のキャッチャーは永野主将 ©毎日

たことも少なからず影響していた。なぜなら、永野は一九五三年夏の甲子園大会で、捕手として「落球」を経験していたからである。

当時、土佐高(高知)三年生だった永野は、夏の甲子園大会で、空谷泰投手(のち中日、近鉄)擁する松山商(愛媛)と対戦。土佐が二対一

とリードした九回表二死一、二塁。打席の三番・空谷をツーストライクと追い込み、優勝まであとワンストライクに迫ったときだった。

捕手の永野は深紅の大優勝旗がベンチ横に運ばれてくるのをマスク越しに見てしまった。閉会式のセレモニーに備えるため、関係者が用意したものだ。

「次の一球は、アウトローにコントロールされたカーブでした。空谷がスイングすると、ボールがバットのつっつらに当たり、ファウルチップになりました。しめたと思いい、ミットを差し出した瞬間、ボールがこぼれ落ちたんです。捕っていたら、スリーアウト。ゲームセットでした。」

主将である自分が優勝旗を受け取るシーンを頭に思い描き、油断したことが、落球を招いたんです」

永野と土佐高の不運はつづく。直後、空谷はセンターへ平凡なフライ

を打ち上げ、永野は胸を撫で下ろした。センターが捕球すれば、ゲームセット。自分のミスは帳消しになる。そう思ったのも束の間、センターからホームに吹く強風に煽られ、ボールが逆戻りしてきた。永野は祈るような気持ちで打球を見つめたが、センター前にぽたりと落ちた。松山商の二塁ランナーが生還し、二対二の同点。そして、延長一三回、松山商に決勝点を許し、土佐は敗れ去るのである。

永野がしんみりした顔でいう。

「もしあのとき、優勝していたら、高校野球の審判にはならなかったでしょう。未練を残したからこそ、審判として甲子園に舞い戻ることになったんです」

土佐高卒業後、永野は慶応大学に進学。あの藤田元司(のち巨人のエース)になり、監督も務める。故人」とバッテリーを組むことになる。慶大

野球部には、永野と藤田の「涙の続投劇」が語り継がれている。

一九五五年十一月六日の早慶戦だった。ピンチを招いた四年生の藤田を交代させようと、マウンドに向かった阪井盛一監督の前に、二年生の捕手が立ちはだかり、涙ながらに訴えた。永野だった。

「監督、藤田さんに投げさせてください。最後の早慶戦です。このまま藤田さんを卒業させたら、あまりにかわいそうです」

二塁手の佐々木信也(のちニュー



準優勝権を受ける土佐高の永野主将 ©朝日

スカスタール)など、内野手が集まり、口々に続投を訴えたことで、阪井監督は折れた。

後続を断った藤田は、ベンチに戻ると、アンダーシャツの袖に顔を埋めた。永野たちが取り囲み、慶応ベッチ内は啜り泣きに包まれた。

このあと、藤田は別人のように立ち直り、球威をとりもどして得点を許さなかった。そして、永野が三塁打を放つなど、早稲田の投手に襲いかかり、逆転勝利を収めるのである。

「ゲンゲン(元玄の愛称)のことは一生忘れない」(藤田)

人との出会いが、永野の運命を変えていく。

この試合ではないが、藤田が投げた会心のストレートをボールと判定され、背後を振り返ると、「いまのボールでいいだろう」という球審の声が返ってきた。一九六五年から

一年連続、春夏の甲子園大会決勝で球審を務めた郷司裕(故人)であった。

郷司にはこんな持論があった。「高校野球の審判というのは、木陰で着替え、試合が終われば汗を拭き、すっと帰る。原点は、校庭や小さな野球場の中にある」

永野は大学卒業後、住友金属に就職。社会人野球で五年間プレーしたのち、審判に転じる。

「審判委員をやってみないか」

誘ってくれたのは、のちに「高野連の天皇」と呼ばれる佐伯達夫である。今回、永野の自宅を訪ねたとき、家宝にしている佐伯の色紙を見せてくれた。

「無心の球を無私の境地で追い続けることこそ高校野球の生命である」永野はその言葉を心に刻み、三〇年間も甲子園で審判を務めることになるのである。



星稜対箕島、延長18回裏の堅田投手 ©朝日

## 甲子園に 舞い戻った堅田

堅田外司昭は一九六一年十月二十二日、金沢市北部の不動寺町で生まれた。九歳のときから新聞配達をし、足腰を鍛えたという。星稜高校に進学し、野球部に入ると、山下智茂監督の千本ノックが待っていた。「投手と打者の距離から、一時間ノックを受けました。毎日、頭の中が真っ白になりました」  
山下には、こんな信念があった。

「気絶する直前がいちばん上達する」  
そこまで練習をし、甲子園のマウンドに上がった堅田だったが、箕島の終盤は疲労の色が濃かった。

堅田が苦笑する。  
「まさか延長一八回まで戦うと思っていなかったもので、昼はおにぎり一個しか食べていませんでした」  
箕島に敗れ、故郷・金沢に帰った

堅田だったが、すぐさま旅支度を強いられた。全日本高校選抜のメンバーに選ばれ、ハワイに行くことになったのである。  
「ハワイで選手たちと話して驚いたのは、ほとんどがプロ、社会人、大学から声がかかっていたこと。残念なことに、わたしはまだ決まってい

ませんでした。ですから、帰国し、松下電器産業(現・パナソニック)から誘われたときは、すごくうれしかった。そのあと、いくつか話があったのですが、最初に声を掛けてい

ただいた松下に就職したんです」  
社会人野球の名門チームに入り、都市対抗出場をめざした堅田だったが、レベルの高さを痛感する。

「結局、五年間プレーヤーとしてやり、成績は一勝一敗。マネージャーにならないかといわれ、転身を決断しました」  
マネージャーに就任し、大阪府野球連盟の人たちとの結び付きを強めたことが、堅田の運命を変える。

「ぼくを審判の世界に誘ってくれたのが、あの三宅享次さんでした」  
甲子園大会では知る人ぞ知るベテラン審判。有名なのは、一九九八年夏の甲子園大会二回戦、豊田大谷(愛知)と宇部商(山口)の試合が、延長一五回裏、サヨナラポークで決着がついたときのこと。記者たちが、「なぜ、あんな場面でポークを取るか」と詰め寄ると、三宅は一喝してみせた。

「審判はルールの番人だ。以上……」  
堅田は社会人野球の都市対抗予選、日本選手権予選などで経験を積み、二〇〇二年からは大阪府高野連に所属。その翌年夏、念願だった甲子園の舞台を踏むことになる。

「甲子園デビューが決まると、大会前に永野さんから食事に誘っていた

だき、『がんばれよ』と激励のお言葉をちようだいました。本当に優しい方で、ぼくの先生です」  
二〇〇三年八月十一日、夏の甲子園大会一回戦、筑陽学園(福岡)対



堅田外司昭氏 ©朝日

東北(宮城)の試合で、堅田は二塁塁審としてデビューした。  
「試合前、両チームの挨拶が終わり、二塁へ向かうとき、延長戦に入ると二本のホームランを打たれた左中間と、一塁手の加藤直樹が転倒したフアウルゾーンを見てしまいました」

## ナンバーワンの剛速球 江川卓の思い出

永野は一九六四年から一九九三年まで、春と夏の甲子園大会で、三〇〇試合も審判を務めた。高校野球の黄金時代であった。

「印象に残っている選手は、年代順に挙げると、投手なら、平松政次(岡山東商―大洋)、木樽正明(銚子商―ロッテ)、江川卓(作新学院―巨人)。打者なら、藤田平(市立和歌山商―阪神)、清原和博(PL学園―西武ほか)、立浪和義(同一中日)。ひ

とりだけ挙げるとすると、やはり江川君になるでしょうか」  
なにしろ、江川が甲子園で投げた六試合のうち四試合で永野が塁審を務め、新聞記者から「江川担当」と呼ばれたほどである。藤田元司など、数々の速球投手の球を捕手として受けた経験を買われたのである。

「江川君の投球が強烈なのは、甲子園デビューを飾った一九七三年春のセンバツ一回戦、北陽(大阪)との試合です。一九奪三振は任巻でした」  
江川の投球がバットにふれただけで、スタンドから大きな拍手が巻き起こったほどである。この大会、四試合で被安打はたったの八。奪三振はじつに六〇におよんだ。  
「甲子園で数多くの剛球投手を見ました。ストリート(の速さ)だけなら、江川君がナンバーワン。とり

わけ、高めの球の伸びが素晴らしく、初めてマスク越しに球を見たときは、ストライクゾーンを外れてホップする高い球でも、右手を挙げそうになりました。そのため、プロテクターの裏で、右手首を左手でつかみ、球がキャッチャーミットに入ってから、一拍おいてジャッジするようになりしました」

「雨中に散った怪物」と評された江川の甲子園最後の銚子商(千葉)戦も、永野が球審を務めた。

○対○で迎えた延長二回裏、江川は一死満塁、カウントが三ボール二ストライクという絶体絶命の場面を迎えた。そのときの心境を、自著『たかが江川されど江川』に綴っている。

「これが最後の一球という場面に直面して、僕はみんなに相談したかった。まがりなりにも、三年間いっしょに汗を流してきた仲間である。こ

負傷し、それぞれ手当てで四分間の試合中断を余儀なくされたんですが、力を出し尽くそうという姿勢がひしひしと伝わってきました。ぼくらの仕事は、優勝候補だとか、強豪校だとか、カードは無関係。選手が全力を尽くしてくれることが、いちばんの喜び。最後は、広陵の投手が押し出し四球を与え、三重が五対四で勝ちました」

広陵の吉川雄大投手は最近の高校生にはめずらしく、身長が一六七センチと小柄だった。試合後、甲子園優勝二回を誇る広陵の中井哲之監督が目を細めた。

「吉川は努力すればここまでできるということを証明してくれた。彼だけでなく、選手たちは持っている力を十分に出してくれた」

堅田が高校野球の魅力を語る。「高校野球の素晴らしところは、選手の一生涯命きと応援する人たち

んなことは、他のチームだったらいつもと当たり前のようにやっていたとかもしれないが、僕は集まったみんなに初めてこう問いかけた。

「真つすぐを力一杯投げたいんだ」(中略)

「お前の好きなボールを投げろよ。お前がいたからこそ、俺たちもここまで来れたんじゃないか」

僕はもう一度、チームメイトたちの顔を見渡し直した。嬉しかった」

その直後、不思議なことが起こる。江川がマウンドでキャッチャーのサインを見る際、ボールを握った右手の甲を腰の後ろにやったのである。いきおいボールは雨で濡れた。

「あの冷静な江川君には考えられないことでした……」(永野)

次の一球は、高めに大きく外れ、押し出しになった。サヨナラ負けだった。江川の顔は晴れやかであった。勝敗よりも、最後の最後に、チ

の気持ちが一つになるところ。甲子園大会だけが高校野球ではありません。わたしは高校野球の大阪府大会を一回戦から担当します。この一回戦を大事にしてあげたいと思っます。仮に、○対一○で五回コールド負けを喫したとしても、最後のヒット一本に、勝ったような盛り上がりを見せ、笑顔が溢れると、本当にうれしい。高校野球のいちばんの魅力は、こうした選手たちの一体感にあるのではないでしょう」

堅田が強調する。「審判にも、選手同様、心技体が必要。だから、身体を整え、技術を磨き、心の準備をしなければならぬんです」

大先輩の永野については、これまでも、これからも「先生」だということ。「永野さんとは、取材を通し、何回も会う機会がありました。そのたびに、字ぶことがたくさんあるんです」

### 未完の憲法

憲法草案 木村重太郎 ● 本誌10月号掲載 増田出版社  
佐賀県民権論「この本を註して、憲法について勉強し、憲法の大義と若くは憲法が憲法として永く永くの討論」

ームメイトと一つになれたことがうれしかったのである。

### 審判にも必要な心技体

堅田が初めて球審を務めたのは、二〇〇七年春のセンバツ大会一回戦、市川(兵庫)対聖光学院(福島)。以来、センバツは四、五試合(球審は一、二試合)。夏の選手権大会は六、七試合(同二、三試合)に出場。甲子園大会に欠かせない審判になり、永野のような名審判の道を歩み始めている。

八年前で印象深い試合を尋ねた。「いくつもありますが、最近では、昨年夏の一回戦、三重対広陵の延長二回。七回と八回に広陵の選手が

永野が「弟子」を語る。

「師弟関係だなんて、めっそうもない。堅田君は、すでにわたしの領域を遙かに越えています。取材でいっしょになり、大阪府大会一回戦の重要さを説いたとき、そのことを痛感しました」

### 恐ろしさを知った佐賀北対広陵戦

永野に取材した際、話が高校野球の審判論におよぶと、にわかに眉を曇らせた。

「八年前のある試合をきっかけに、高校野球の試合を凝視できなくなりました。長い間、よくあんなことしたなあと思います。審判は、ようやらん。恐ろしい。そう感じました。佐賀北対広陵の試合です」

少し説明が必要かもしれない。佐賀北対広陵戦は、二〇〇七年夏の甲子園大会決勝。八回一死まで一

安打一奪三振と完璧な投球をつづけていた広陵のエース・野村祐輔（現・広島）が、一死満塁というピンチを迎え、三ボール一ストライクから投じた五球目の真ん中から沈む球が、ボールと判定され、押し出し。佐賀北は一对四と三点差に迫り、三番・副島浩史（三塁手）が満塁アーチを放ち、五対四と大逆転。奇跡の優勝を遂げた試合である。

永野が恐ろしさを感じたのは、押し出しになつた球が、ストライクではないかと疑われ、ボールと判定した球審に誹謗と中傷が集中したことがある。

「審判はアウト、セーフの判定を覆すケースもありますが、ストライクかボールかのジャッジは実質訂正できません。審判も一球入魂が求められるんです」

佐賀北対広陵戦とよく似た場面が、過去にもあった。一九六九年夏

の甲子園大会決勝。松山商（愛媛）対三沢（青森）の延長一五回裏、一死満塁、三ボール一ストライクからの五球目である。

この試合の球審は、名審判の誉れ高かった郷司裕。郷司は松山商の井上明が投じた五球目を自信を持ってストライクと判定したのだが、試合が延長一八回引き分けとなり、私服に着替えて甲子園球場を出ると、新聞記者に囲まれた。

「あの球は低かったんじゃないか」郷司は宿舎に帰ると、テレビのスポーツニュースをすべてチェックしたが、信念は揺るがなかった。

「横から見れば低かったかもしれないが、あの球は上からふわっときて、外のほうに落ちた。わたしから見ると、完全にストライクだった」ところが、翌朝の新聞は、

「あれはボールだった」という論調が多かった。郷司と松

山商の一角俊作監督が同じ明治大学出身者であることを書いている新聞さえあった。

郷司は重い気分のまま再試合が行われる甲子園に向かったが、審判控え室に入ると、気持ちを切り替えた。「すべてを無にしてジャッジすること。それが審判委員のあるべき姿だ」と思い出すのは、永野が佐伯達夫からもらった色紙である。佐伯の言葉は、そっくりそのまま審判に置き換えることができた。

「無心の球を無私の境地で判定しつづけることこそ高校野球審判の生命である」

永野にとって、審判とは何なのか。「試合終了後、両チームの選手たちへ、『おい、きょうの試合には審判がいたんだっけ』といってもらえるような試合が、審判にとって最高の試合です」

限りなく「無」に近づくといい

となのだろうか。

一九九一年のセンバツ大会まで、審判が水を飲めなかったという事実は、審判を人間としてではなく、神として扱っていたといっても過言ではない。しかし、堅田によると、いまは反対に「水を飲みなさい」といわれているという。

「テレビには映らないかもしれないませんが、一塁側にボールボーイが二人いて、一人は一塁と二塁の審判、もう一人は球審と三塁の審判に水の入ったペットボトルを持ってきてくれるんですよ」

取材を終えると、今回も永野と駅

前の焼鳥屋で飲むことになった。一〇年前に会ったとき、わたしはビールをたくさん飲み、何回もトイレに立ったが、永野は一度も行かなかった。その疑問を口にすると、永野はジョークで切り返した。

「トイレへ行くのを我慢するのも、審判の仕事ですから」

そのとき、店を出ると、小糠雨が降っていた。わたしが折り畳みの傘をバッグから取り出し、広げ、さしかけると、「けっこうです」と永野は身をかわした。

「審判は雨が降っても傘をさせませぬから」

そんなことを思い出し、ビールは一杯だけにし、ウーロンハイに切り替えたのだが、不覚にも二回トイレに行き、一回の永野に負けた。

外に出ると、今回も俄雨が降っていた。今度はわたしがバッグから傘を取り出す前に、永野が傘を開いた。審判をやめて二〇年以上が経過し、長年の呪縛が解けたのかもしれない。一〇年前の逆転劇に、永野とわたしは顔を見合わせ、大笑いした。

（文中敬称略・了）

北海道から九州まで  
全国に広がる  
ネットワーク

創価学会専門  
仏壇 仏具

金剛堂

全国どこへでも  
真心を  
お届けします

カタログ無料進呈中！

金剛堂

カタログショッピング

0120-0700-42

受付時間 午前10時～午後6時まで

ウェブショッピング

www.kongodo.co.jp